

Title	河地重蔵著『毛沢東と現代中国』
Sub Title	Mao Tse - tung and contemporary China
Author	山田, 辰雄(Yamada, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1972
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.45, No.7 (1972. 7) ,p.129- 135
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19720715-0129">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19720715-0129</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 紹介と批評

河地 重蔵著

### 『毛沢東と現代中国』

#### 一

歴史における新しい時代の到来は、過去の事実そのものを変えるものではないが、事実に対する新しい光のあて方を提供する。中国におけるプロレタリア文化大革命（以下文革と略称）が一応収束した今日、われわれは、そこで提起された諸問題を基礎として、いま一度中国現代史をふり返り、中国史、ひいては、世界史の新しい展望を創り出す努力を試みうる時点に立っている。本書は、文革で提起された諸問題、とくに社会主義経済建設の諸問題を手がかりとして毛沢東と現代中国の持つ意味を問おうとする、興味ある試みの一つである。

本書は、著者の論文集であり、相互に関連した三つの主題から構成されている。第一の主題は、文革を通してあらわれた中国社会主義、とくに毛沢東の社会主義のヴィジョンの特徴にかんする問題である。第一章「文化大革命と中国社会主義の特質」、第二章「毛沢

東の中国経済観と文化大革命」はこのなかに含まれる。主題の第二は、中国社会主義の特徴を歴史的にさかのぼって追求しようとする試みであり、第三章「毛沢東の農民革命論」はこれに該当する。第三の主題は、第一、第二の主題の背景となつている、旧中国の農村経済体制の歴史的発展と、その変革過程の政策にかんする問題である。第四章から第八章にかけて扱われている「旧中国の農村経済体制と村落」、「アヘン戦争以後のウェスタン・インパクトと中国の農村経済体制」、「一九三〇年代の農業生産力構造と社会主義建設過程における動向」、「中国における農業発展政策の変遷」、「文化大革命と農業発展政策」の諸問題は、第三の主題の範疇に属すると考えてよいであろう。著者も指摘するように、第三の主題でとりあげられている諸問題は、第一、第二の主題に対して「補論」の役割をもっている。事実、第四章から第八章において興味ある見解が示唆されているが、それらは既成の研究に依拠するものが多い。それとは対照的に、第一と第二の主題を扱った第一章から第三章においては、著者独自の見解と分析が展開されているように思われる。したがって、本稿は、主として第一、第二の主題をとりあげ、必要に応じて第三の主題に言及することになるであろう。

ところで、著者は以上の諸問題の検討を通して正しい中国の映像を得ることを目ざしているが、既成の理論的枠組のなかでこの目的を達成することがいかに困難であるかを率直に認めている。著者の言葉を借りれば、「中国は、いまや特異なる社会主義国として、世界史上に巨大なる地位を占めるにいたつた。中国研究者はもちろ

ん、世界の政治・経済を考察しようとする者にとつて、さらには二〇世紀文明の未来の洞察を試みようとする者にとつてさえ、中国の存在は、一つの挑戦を意味している」のである。要するに、著者は今日の中国の存在が現代文明への挑戦であり、したがつてそのかぎりにおいて、それはわれわれをとりまく現代文明とは異質のものである、という想定に立脚しているということが出来る。

著者は、今日の中国文明の異質性を前提として、正しい中国の映像をつくり出すために、多角的接近方法の必要であることを説いている。すなわち、第一の接近方法は、マルクス・レーニン主義の枠組のなかで中国を理解することであり、この場合、ソ連社会主義との比較が中心的課題となる。第二の接近方法は、低開発国発展論の枠組のなかで、アジアの後進的農業国としての中国を理解することであり、この場合、インド等アジア諸国との比較が中心的課題となる。第三の接近方法は、以上の二つの方法の水平に交わる交点を、さらに垂直につらぬく歴史的枠組のなかで中国を理解することであり、この場合、中国社会主義の特質の歴史的發展そのものが中心的課題となる。著者も認めているように、本書で採用された中国への接近方法は、主として第三の歴史的方法である。その意味において、第三章の「毛沢東の農民革命論 毛沢東における『中国社会主義』の特質の史的形成過程」は、本書の中核をなすものであると考へることが出来るであろう。そこでまず、第一の主題との関連において、著者によつて明らかにされた中国社会主義、とくに毛沢東的社會主義のヴィジョンの特徴を検討することから始めることにし

よう。

## 二一

著者は、中国社会主義との関連で文革によつて提起された諸問題が党、軍、階級の問題であるところを、これら諸概念の検討のうえに、中国社会主義のヴィジョンを再構成しようとする。著者の理解するレーニン主義的党は、「プロレタリア独裁を代行する、より少数の、先進的なマルクス主義によつて理論的に武装した、献身的な職業的革命家の集団たる(とともに)、無謬性と不可侵性の神話」が要請された。ここでは、党と党外大衆との同質性、ならびに、指導・被指導関係が前提とされていることがわかる。このようなレーニン主義的党概念とは対照的に、文革における党外大衆による組織破壊の現象は、党と党外大衆との同質性、党の党外大衆に対する指導性、ならびに、党の無謬性と不可侵性の神話を破壊することになつた。このような党と大衆との関係は、レーニン主義的党の代行主義とは対照的に、中国共産党がその發展過程で採用してきた大衆路線に由来する。党は、「大衆のなかに埋没した統一の核心である」という意味において、さらには、外から挿入されたのではなく「まわりの大衆からおのずから選びだされた」という意味において「全中国人民の指導的核心」であつた。したがつて、ここでは一切の党権力の根源が大衆自身のなかにあつたということになるのである。

第二の軍も、大衆との関係において、党と同様の性格をもつ。す

なわち、人民解放軍は、「単なる戦争集団ではなく、農民のなかからえらばれ、プロレタリアートにかわつて革命を指導した勢力」であつた。それゆゑに、文革の時期におけるように、軍は党の指導機能を一時的に代行したのである。第三の階級概念について、毛沢東は、生産手段の社会主義的所有に移行した社会においてさエブルジョア階級が存在し、それは、「恒常化された不勞所得という形で労働者階級からの搾取」を行う「官僚階級」によつて代表される、と主張している。このような毛沢東の階級概念の根底にあるのは、「生産手段所有制の法的・制度的側面でなく實質的内容としての管理・支配の關係を、生産關係概念のほんらいのよりひろい範圍のなかに包摂して階級の問題を考えようとする」態度であつた。

以上の党、軍、階級の諸概念の検討を通して明らかにされたように、文革を通してあらわれてきた中国社会主義の諸問題は、既成のマルクス・レーニン主義の枠組を越えたところで理解されなくてはならず、そこにはじめて中国的、もしくは、毛沢東の社会主義のウイジョンが再構成される。著者の言葉を借りれば、毛沢東にとつて「あるべき社会主義は、真の意味で核心たる党が指導し、毛沢東のいうマルクス主義的作風を体现する人民解放軍が支柱となり」、「党官僚とテクノクラートが中央集権的に運営する経済体制ではなく、人民の自律性にもとづいた、コミュニシ的な生産生活共同体の連合を基礎とするものである。この共同体の内部では、『古い分業』の固定化は否定され、すべてのものが、工業と農業をふくむ自給的、多角的生産と管理のすべての種類の労働に参加することによつて、

あらゆる種類の能力を身につけ、あらゆる種類の権力の一片を分有しあう」ことを意味したのである。

このような社会主義社会の建設方式の特徴は、以下に述べる三点に要約される。第一点は、社会的分業の否定である。しかし、ここで注意しなくてはならないのは、毛沢東が、社会的分業そのものを否定しているのではなく、それによつてもたらされる人間の機能の「專業化」、社会的地位の固定化、不平等な「階級」の発生、官僚主義の抬頭を否定していた、ということである。第二点は、社会的分業の否定がさらに徹底され、「三大差別」が否定されていることである。「三大差別」とは、都市と農村、労働者と農民、頭脳労働と肉体労働との区別を意味する。このような「三大差別」の否定は「あらゆる種類の能力を身につけ、あらゆる種類の権力の一片を分有しあうこと、そこに平等のもつとも根源的な基礎を求めること」であつた。第三点は、「中国全体を、無数の独立自主性をもつ生産生活単位の集合体としてみる中国社会・経済観である。」このような自立的単位における人格の全面的解放の要請は、共同体原理の再生にはかならない。しかも、この共同体原理における自立的生産生活単位は、孤立的なものではなく、国民的統合への志向性をもつとともに、新しい社会における人間疎外の克服を旨とするものであつた。

文革を通してより明確になつた中国社会主義の特質を以上のように描き出す著者は、一九五九年七月から八月にかけて廬山で行われた中共八期八中総会における毛沢東と彭徳懷との対立のなかに、こ

のような社会主義のヴィジョンへの挑戦を見出し、そこに文革の発端を求めている。そして、この社会主義のヴィジョンをつぎのよう  
に位置づける。すなわち、それは、「後進的風土におけるマルクス主義の受容と、三大差別の消滅という理想が示すヨーロッパ近代の超克—マルクス主義が本来ヨーロッパ近代の所産であるとすれば、ヨーロッパ的マルクス主義の超克でもある—の先進的志向との興味ある結合」である。しかし、著者は、毛沢東ならびに中国の社会主義における西欧近代の超克の点にかんして、「コミュニン原理や分業の否定は、毛沢東思想の近代超克につながる普遍性の側面を示すものであるが、しかしこのことはかならずしも、かれの発想的基盤が近代の成熟と退廃にあつたことを意味しない」と考へる。換言すれば、毛沢東の社会主義ヴィジョンにおける近代超克の方向は、まさに毛沢東が生きぬいてきた近代中国社会の西欧近代に対する辺境性に由来するものであつた。この辺境性こそが中国革命の原動力であり、第二の主題である毛沢東の農民革命論であつた。

## 三

中国社会主義の特質を歴史的に支え、西欧近代の超克の原動力となつている、毛沢東の農民革命論とは、どのようなものであろうか。著者は、農民革命論の独自性を三点において指摘している。第一の独自性は、マルクス・レーニン主義において革命におけるプロレタリアートの指導性が不可欠の要因であると考えられているのに対して、毛沢東は、農民を「革命の衝鋒」とみなし、農民の革命性

に深い信頼をおいていたことである。著者は、毛沢東の農民に対する深い信頼の契機を、一九二五年の湖南における彼の農民運動の経験に求めている。第二点は、毛沢東が、農民の革命性を現実組織していくための農村革命根拠地建設の可能性を、中国の政治経済状況の現実的分析によつて論証したことである。毛沢東は、一九二八年一月に書いた「中国の赤色政權はなぜ存在することができるのか」と題する論文のなかで、農村革命根拠地存続の原因を、地方的農業経済と帝国主義の間接支配に由来する複数の白色政權の対立抗争、人民の革命実践の経験、革命情勢の全国的発展、正規の赤軍の存在、共産党組織の力と正しい政策（著者は、意識的にか無意識的にか最後の要因を排除しているが、このことが後に問題となる）の諸要因に求めている。第三点は、毛沢東が、「産業プロレタリアートのいない農村根拠地」において、それに代る紅軍の指導的役割に注目したことであつた。農村革命根拠地で組織された農民は、プロレタリア化されなければならなかつた。紅軍は、「プロレタリアートにかわつて農民を組織する核」であり、そのためにも紅軍自体のプロレタリア化が必要であつたのである。以上の諸条件のなかから、「農村作風」と「遊撃習気」にもとづく「現物支給の共産主義的生活」という、毛沢東の理想とする「マルクス主義的作風」が生れてきたのである。

それでは、農民革命論はどのような発展の方向をもつていたのであろうか。著者の見解によると、ブルジョア革命の古典的形態としてのフランス革命は、領土制土地所有の廃止を目ざしたのであつ

て、地主制一般の廃止を目ざしたのではない。したがって、毛沢東の農民革命論が究極的には地主制一般の廃止を目ざすかぎり、それは単なるブルジョア革命の範囲を超えている。地主制一般の廃棄によつてもたらされる農民的土地所有制は、資本主義的發展と同時に社会主義的發展への可能性をもつ。それがどちらの方向をとるか、地主制廃棄を推進してきた権力の性格に規定される。毛沢東の農民革命論が、「プロレタリアートと農民の推進する革命」であるかぎり、資本主義的發展の可能性は抑制され、それは本来的に社会主義へ發展していく方向性をもつていたのである。

著者は、農民革命論の原型の確立を一九二七年以降の農村革命根拠地建設の時期に求め、この原則は抗日民族統一戦線の時期を通して堅持され、中華人民共和国成立以後の社会主義建設のなかで展開されると考へる。このようにして、先に言及した中国社会主義の建設方式の特徴は、農民革命論の経験によつて説明されるのである。

第一の社会的分業の否定は、「農村根拠地は経済的におくれれており、それぞれ孤立し、流動的であり、根拠地と根拠地、あるいは根拠地内部の各地、各部門、各单位を有機的に統合した経済機構も、交通運輸機関や通信施設も欠如している」状況から生れてきた原則であつた。毛沢東は、このような状況のなかで、分業の否定が実質的には進歩的役割を果すものと考へていた。ひるがえつて、一九四九年以降の中国をみると、中国は、依然として工業の發達が不十分であり、大部分が生産性の低い、文化的におくれた農村であり、「高い生産水準のもとで有機的に統合された社会経済体制」が存

在してはなかつた。このような条件の下では、各政治経済単位、さらには各個人が分業を排し、自力更生の原則にのつとつて社会主義社会の建設に参加することが、依然として進歩的意味を有すると考へられたのである。

第二の三大差別は、マルクスにあつては、「生産力の巨大な發展」によつて克服されると考へられていたのに対して、毛沢東にあつては、農村革命根拠地における経験によつて克服されると考へられていた。すなわち、農村革命根拠地においては、現物支給にもとづく平均主義的生活が行われており、各人は肉体労働者であるとともに頭脳労働者であり、農民は農業とともに工業にたずさわリ、農村が都市の機能をも果していたのである。第三の「中国全体を、無数の独立自主性をもつ生産生活単位の集合体としてみる中国社会・経済觀」も、農村根拠地の産物にほかならなかつた。農村革命根拠地は、「生産の単位であつたと同時に、『現物支給の共產主義的生活』の単位であつた」。工農商学兵、さらには行政と合作社を結合した人民公社、武漢鉄鋼コンビナート、大慶油田等も、以上の観点から見て、「生産単位であると同時に、自給自足的性質をそなえた生活単位」であつたのである。

#### 四

著者の立論を以上のように理解したうえで、最後に私は、二つの問題を提起してみようと思う。今日文革を見る視角は、各人のもつている問題意識によつて異なる。ある人は、そのなかに権力闘争の力

学と、一つの権力の崩壊から新たな権力の創出の過程を見出すかもしれない。またある人は、文革のかかげた理念を現実との関係において見、そこに現実における理念の後退を見出す。なぜなら、理念が純粹な形でとらえられればとらえられるほど、常に現実はその理念から遠ざかつていくからである。さらにある人は、われわれが生活している現代社会に対する批判から出発して、文革の理念のなかに現代社会のアンチ・テーゼを見出すかもしれない。

そこで第一に指摘しなくてはならないことは、本書は基本的には第三の視角に立っているということである。すなわち、著者は、文革を通してあらわれてきた中国社会主義の特質のなかに、現代社会の基底にあるヨーロッパ近代の所産の超克を見出し、しかも、このヨーロッパ近代の超克の原動力を現代中国の歴史的成立過程に求めている。この点にかんして、本書に示された著者の努力は高く評価されなくてはならない。しかし、依然として問題が残るように思われる。著者が今日の中国社会主義の特質を形成する原動力となつたと主張する農民革命論が、中国という後進農業国の土壌から生れてきたものであることは、すでに明らかにされた。そして、それゆえに、農民革命論は、工業先進国の歩んだ途を今までのところ回避することができたのである。それにもかかわらず、このことが果してヨーロッパ近代の「超克」につながっていくのであろうか。私自身中国現代史を、その理念においても運動形態においても、列強によつて中国にもたらされたヨーロッパ近代の所産に対する反抗と新たな体系の創造と見る視角に反対ではない。しかし、それにもかかわ

らず、中国における生産力の発展は、農民革命論の変質をもたらし、先進工業国の途を歩むのではないかという疑問はどのように答えられるのであろうか。換言すれば、歴史的经验としての農民革命論が、今後の中国社会の発展のなかで、依然として妥当性をもちうるのかどうかという疑問がここにはある。著者もこの問題に無関心であるわけではない。農民革命論のなかにある共同体原理の将来の変化の可能性について、著者はつぎのように述べている。「この共同体は進歩の契機を内包しているのであるから、いつまでも不変ではありえない。毛沢東が共同体的思考を展開するにあたって認識した基礎的諸条件も変化をとげていくにちがいない。その将来において、共同体原理あるいは毛沢東の思考方式は、新しい国民的統合にいかなる痕跡をのこしていくか、逆に新しい統合のもとで、共同体的原理、毛沢東的思考方式は、どのような変化をとげていくか。これはのこされた問題である。」著者がここで示唆していることは、共同体原理、毛沢東的思考方式、農民革命論が、中国の新しい国民的統合のなかで変化する可能性を認めつつも、その変化の方向性についての断定を避けていることである。しかし、著者の農民革命論の有効性を考える観点からしても、また、文革のなかに近代ヨーロッパ文明の超克を見ようとする観点からしても、中国社会主義がどのような方向に発展するのか、換言すれば、それが近代ヨーロッパの超克となりうるのかどうかという問題に答えることが必要であると思われる。これは決して容易な問題ではないが、著者が、農民革命論という歴史的立論から、さらに一歩進めて未来におけるその展

開の可能性を理論的に検討されることを、私は期待してやまない。

第二の問題点は、農民革命論におけるプロレタリアートの役割である。著者も指摘するように、毛沢東の指導する中国革命の勝利が、農村革命根拠地において組織された農民の力に大きく依存することによつてもたらされたこと、農民の精神のプロレタリア化にあつて紅軍が中核となつたことは否定しえない事実である。しかし、毛沢東が農民の革命性と紅軍の重要性を高く評価したことは、著者の主張するように、プロレタリアートに代る紅軍の指導的役割を認めたということになるのであろうか。紅軍の指導的役割とは、

「プロレタリアートにかわつて農民を組織することであり、農民にプロレタリア精神を注入することであつた。この意味における紅軍の指導的役割は、中国革命における紅軍の指導性と同義に解釈することができるのであろうか。毛沢東は、中国革命におけるプロレタリアートの指導性を否定しなかつた。彼は、後進農業国としての中国において、農民との対比で相対的に弱少なプロレタリアートの指導性は、共産党の農民に対する指導によつて確保されると考えた。実質的に弱少なプロレタリアートの指導性が党によつて代表されるかどうかは議論の分れるところであるが、少くとも著者は、プロレタリアートに代る紅軍と農民の重要性を重視するあまり、党とプロレタリアートの指導性の問題を等閑視してはいないであらうか。事実著者は、中共六大会決議を引用することによつて、毛沢東が都市プロレタリアートの指導性を軽視したと考へている。さらに、先に言及したように、毛沢東が指摘する農村革命根拠地存在の諸条

件のなかから、著者は、意識的にか無意識的にか、党の指導の条件を排除することによつて、農村根拠地の運動に対する党の指導性を軽視しているのである。それでは、以上の事実は、著者が、党またはプロレタリアートに代つて、中国革命の指導性を紅軍または農民のなかに見出したと理解されるのであろうか。この点にかんし著者の立場は明確さを欠いているように思われる。したがつて、私は、農民革命論において、革命の指導性をめぐる党、プロレタリアート、紅軍、農民の關係にかんするより明解な著者の見解を期待するものである。

(ミネルヴァ書房 二二〇〇円 二四三頁 一九七二年)

(一九七二・五・二三)

(山田 辰雄)